



【ことにとんでんへいそんへいおくあと】

琴似屯田兵村兵屋跡

みっしゅうせい

密集制の兵村

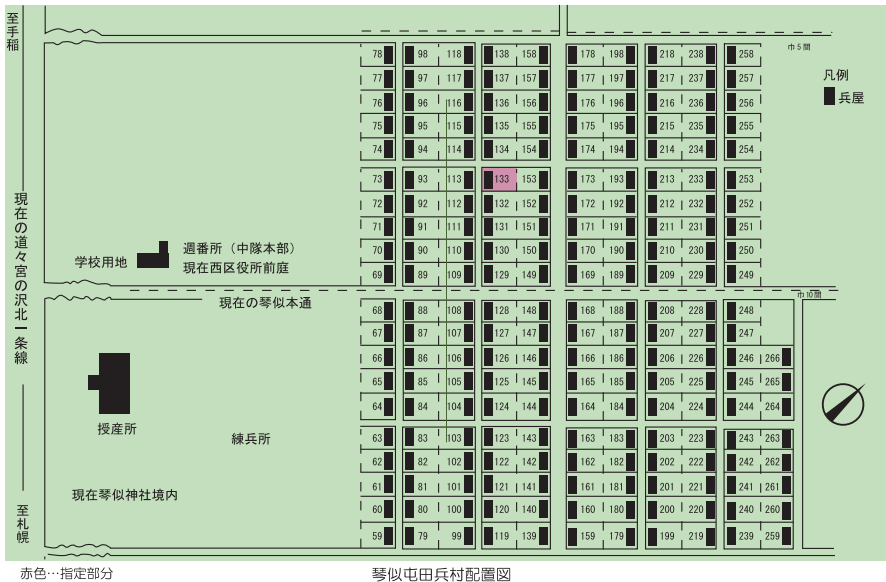
この建物は明治7(1874)年に建てられ、同8(1875)年清野専次郎が入植時に給与された第133号兵屋を復元したものである。周囲の道路とともに今日まで残されたもので、当時の兵屋と兵村を知るうえで極めて貴重なものである。

琴似屯田兵村(屯田兵第1大隊第1中隊)は、週番所(中隊本部)、練兵場、学校、墓地などの中心施設を南側に集め、その北側に計208戸の兵屋を密集させ、周囲に農地1戸当り5,000坪を配した。住宅地は、1戸当り150坪で、その配置は、兵士の召集、指揮監督の便宜を優先させるため、密集制をとった。その

ため、農地は兵屋から遠く離れてしまうという欠点を生じた。山鼻屯田兵村(第1大隊第2中隊)では、住宅地のそばに農耕地を配置する粗居制をとった。週番所(中隊本部)は兵村の外縁に置かれたが、その後の兵村では中央に置かれた。琴似屯田兵村の経験が、その後の兵村建設に生かされたのである。

内部の様子





赤色…指定部分

琴似屯田兵村配置図

17.5坪の1戸建て

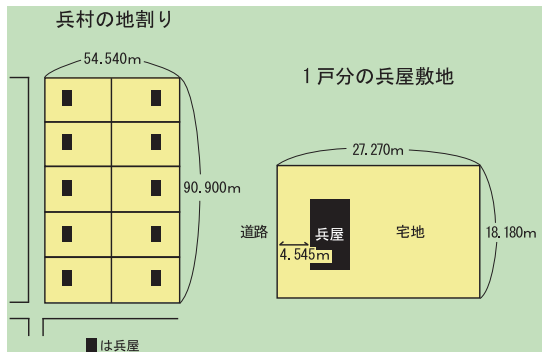
琴似屯田兵村兵屋の設計にあたった開拓使東京出張所宮緒係は、2軒長屋としたが、開拓顧問ケブロン^{ケブロン}の意見に基づき、1戸建てとなった。しかし、ケブロン^{ケブロン}の主張したストーブ、壁や天井の白土壁^{しろつちかべ}は採用されず、建坪は17.5坪となった。兵屋は、当時の一般住宅と比べても粗末なものではなく、屋根に石を置く民家よりはるかにすぐれた建物であった。

初期兵屋の様子を伝える

琴似屯田兵村兵屋が作られた後、江別、篠津屯田兵村では、洋式の兵屋が建てられたが、経費が高くつこうえ、洋風間取が生活になじまず失敗し、再び琴似型兵屋に戻した。しかし、極度に厳しい建築条件である本道の奥地での建築は、未熟練者による作業、現地材に大幅に依存したことなどのため建築の質は低下した。なお、この133号兵屋^{わた り くん こつづみ}の居住者であった清野専次郎は宮城県亘理郡小堤村出身である。

概要

- 練兵場……………45,120坪
- 本部敷地……………400坪
- 官舎……………400坪
- 学校……………3,486坪
- 兵屋（1戸分150坪）……………36,000坪
- 農耕地……………3,785,050坪



- **建築年代:** 明治7(1874)年
- **指定年月日:** 昭和57(1982)年5月7日
- **所在地:** 札幌市西区琴似2条5丁目1-12
- **お問い合わせ:** 現地警備員詰所 ☎621-1988
- **観覧形態:** 内部観覧可
- **観覧時間:** 9時00分～17時00分
- **休館日:** 年末年始(12月29日～1月3日)
- **観覧料:** 無料
- **アクセス:** 地下鉄東西線「琴似」1番出口より約150m
JRバス・中央バス「地下鉄琴似駅前」